

# 次代へつなぐ取り組み

## 体験が広げる 新しい魅力

本市の民俗芸能は、この地で生まれ育ち、なりわいを営んできた人々によって、長年にわたり受け継がれてきました。しかし近年、ライフスタイルの変化や少子化などで後継者不足が心配されています。

このような中、市内で民俗芸能を取り巻く新たな試みが始まっています。

赤澤鑑剣舞は、大船渡町赤沢、上山、中央通り地域に伝承されています。毎年8月に家々を回り、位牌を前に演じられる供養の舞いです。

本年3月12日、一般の参加者が、地元の担い手から赤澤鑑剣舞を習うイベント「頼も



装束をつけてもらい、剣舞を体験しました

う！弟子入り体験」が開かれました。このイベントは、発案者の川原夕輝さんが「民俗芸能を通じて大船渡の良さを発信したい」と赤澤芸能保存会にもちかけ実現したもので、集まった9人のうち5人が県外から参加しました。

基本の「扇子踊り」から体験を始め、後半、本番ながらの装束をつけてもらった参加者たちは「貴重な経験ができた」と満足した様子で、「これを機に、地元の民俗芸能を改めて学んでみたい」という人もいました。

## 声

この魅力ある伝統を  
ぜひ次の世代へ



山本徹也さん(広島県)

音楽活動のため、たまたま大船渡に来ていて、このイベントを知りました。面をつけてしまうとまわりが見づらくなり、この状態で踊っている皆さんはすごいと思います。この魅力ある伝統を、ぜひ次の世代へ残してほしいですね。

イベントの運営に当たったのは、インターンとして大船渡に滞在している大学生たち。その中の一人で、進行役を務めた小野果菜さんは、「民俗芸能は大船渡の大きな魅力です。今回のような取り組みが広がれば、民俗芸能をもっと盛り上げていけるのでは」と期待をふくらませていました。

## 大船渡北小学校で 郷土芸能部が活動

大船渡北小学校では、昭和58年から運動会で5・6年生が赤澤鑑剣舞を披露しています。「もっと剣舞を練習したい」という子どもたちの声を受け、平成25年に課外クラブ



大船渡北小郷土芸能部の子どもたち

「郷土芸能部」が発足しました。現在、市内では7つの小学校と5つの中学校で民俗芸能に取り組んでいます。1年を通して活動するのは大船渡北小学校が初めてです。子どもたちは長期休業中も含め、週1回の稽古を欠かさず続けています。

前述のイベントでは、大船渡北小学校郷土芸能部の子どもたちが息の合った舞を披露してみせ、参加者を驚かせました。赤澤こども鑑剣舞は、本年1月に開かれた大船渡市こども郷土芸能まつりにも出演。同じく民俗芸能の保存伝承に取り組む市内6団体の子どもたちとともに、熱のこもった演技を繰り広げました。

# 広がる交流の輪

## 交流に込めた思い

昨年8月の三陸港まつりでは、浦浜念仏剣舞保存会の指導を受けた埼玉県さいたま市の開智中学校・高等学校の生徒が、地元の子どもたちとともに剣舞を披露したほか、吉

浜鑑剣舞(三陸町吉浜)、黒岩鬼剣舞(北上市)の子どもたちとも共演しました。

三陸町越喜来浦浜地区に伝わる浦浜念仏剣舞と金津流浦浜獅子躍は、震災以前から、国外公演も含め、市外での活動や交流を積極的に行っていました。本年2月には、東京都で2つのイベントに出演し



インドネシア・バリ島で地元のガムラングループ「スタマニ」と交流する笹崎鹿踊りのメンバー(平成29年3月)

ています。

「郷土の芸能の価値を普段とは違う目で見つめ直すことが狙いでした。震災を乗り越えて活動を再開したとき、自らの震災体験を語り伝えるという新たな目的が、そこに加わったのです」と、両保存会の代表を務める古水力さんは語ります。内陸部や県外の子どもたちとの交流に力を入れた背景には、こうした思いがありました。

## 民俗芸能が創る つながり

交流は次第に幅を広げ、近年では、国内外から大船渡の民俗芸能を学びに来る人も現れるまでになっています。

「三陸国際芸術祭」のコーディネーターを務める前川十之朗さんは、平成24年、国の要請で大船渡を訪れ、被災者の声を聞いて回りました。その中で前川さんは「三陸で



大船渡の民俗芸能の魅力を熱く語る前川さん

はコミュニティの中心に芸能がある」ことを発見します。平成25年には、「習いに行くぜ！東北へ!!」と題し、国内外のアーティストや一般の参加者を募り、被災地の民俗芸能を教わりに行く企画が始まりました。そこで、指導者と参加者のいきいきした姿を見て、前川さんは確かな手応えを感じたといいます。

「三陸沿岸の芸能は地域との結びつきがとて強いんです。民俗芸能が生み出す交流がコミュニティの結びつきを強め、結束の強いコミュニティが魅力ある民俗芸能を育てるといふ循環が生まれています。小さなコミュニティの一つ一つが、それぞれ個性的

なスタイルを大切に守り伝えたいところが特徴であり、「魅力」と語る前川さん。

その後も民俗芸能を介して国際交流の輪を広げる活動が続けられ、本年2月には、市内の若手継承者6人がインドネシアを訪問し、現地の芸能団体と交流を深めています。

地域社会と風土が長い年月をかけて育んだ民俗芸能には、その土地の魅力がいまも映しだされます。大船渡の民俗芸能に触れた人は、その多様性と奥深さに驚き、ひきつけられていきます。今、民俗芸能は、地域社会の枠を超えて、人と人、土地と土地の新たな絆を育んでいます。